



狼少年と経済危機 (12月のごあいさつ)

平成27年12月1日(火)

長かった夏が終わり、沖縄に冬が来たという感じがします。

「われわれすべては、60年ぶりに、連続して2年間、2ケタの数字にへばりついたひどいインフレに気づいている。金利は20%以上、そして住宅購入資金を借り入れようとする人々にとっては15%を超える途方もない水準に達している」、「800万人近くのアメリカ人が失業している」、「中西部にある都市の1人の労働者は私に次のように言った。私は自分がかせげると思ったよりも多くのドルを家に持ち帰っているが、暮らし向きはますます悪くなるようだ」(ザ・レーガンスピーチ 1981年グロービュー社発行より)

そして、従来の政策とは異なるサプライサイド経済によるレーガン革命、すなわち減税、歳出削減、規制緩和、貨幣の安定による経済の再生が始まった。

レーガン革命は、国家の経済危機に対する米国の挑戦であった。米国の危機は未然に防げたと言えるが、アルゼンチンやギリシャの危機は現実のものとなった。国家の経済危機とは、財政の信認が崩れ、金利の急上昇などにより、経済が大混乱に陥ることである。国家の経済危機を判断する指標としては、財政赤字、長期債務残高、対外債務などが代表的なものであるが、危機とまでいわれる状況になると、それを改めたり、回避することは極めて難しい。

日本の経済危機については、いくつかの兆候がある。財政赤字はいうまでもなく、国・地方の長期債務残高は、1,035兆円とGDPの2倍以上となっている。これは太平洋戦争の戦費調達で悪化した戦時中のレベルに匹敵すると言われている。戦勝という国の受益のために極めてアンバランスな歳出を行った結果である。日本は、財政赤字や長期債務残高の大きさにもかかわらず、長期金利も安定し、問題が生じていない。それは国債消化力と日銀の異次元緩和などによるといわれている。

しかし、国債消化力である家計金融資産は、政府債務と並びつつあり、消化余地もほとんどなくなりつつある。異次元緩和により、日銀の国債保有残高は300兆円を超え、国債残高の50%へ迫りつつある。

狼少年の物語は、狼の住む山里で、大事な羊の群を一人の少年に番をさせ、その危険な環境を忘れ、少年の嘘(言葉)だけをたよりに安心した結果である。日本経済の危機は数々の警告を受けてきたがその通りにはならなかった。それを狼少年(警報)というが、経済環境という根本的なことを忘れ、少年の言葉のみを判断の根拠にすることに似てはいないか。